

2014 年度第 3 回学校評議員会における

「2014 年度の奈良教育大学附属小学校の取り組みのまとめ」（自己評価）に関する報告

◆実施日－ 2015 年 3 月 3 日（火）

◆開催場所－附属小学校 会議室

◆出席者－（学校評議員）兼石亨可氏・藤森善正氏・村奈嘉宏彦氏・吉田佳子氏
（P T A 役員）中野真理子氏
（附属小学校）平賀章三校長・櫻本豊己副校長・山室光生主幹教諭

◆内容

(1) 年間の取り組みについて山室主幹教諭から報告。

*後掲『2014 年度の奈良教育大学附属小学校の取り組みのまとめ』参照。

(2) 項目ごとの評定

項目	良好	おおむね 良好	改善の余地が ある	未回答
教育研究	3	1	0	1
子ども研究	3	1	0	1
保護者・地域との共同	2	2	0	1
大学との連携	3	1	0	1

2014年度の奈良教育大学附属小学校の取り組みのまとめ（自己評価）

奈良教育大学附属小学校（主幹教諭）：山室 光生

学校づくり方針

みんなの学校

研究課題 “子どものために”の本質を問う

わたしたちは、子どもがその子らしく、また人間らしく成長していくことを願い、またそれは人間一人ひとりがおもつ権利であると考えています。

そして、そうした基本的な人権を保障することが公教育の場としての学校の役目であり、学校を子どもと保護者、教職員、そして地域の人たち、ひいては国民みんなに開かれたものとし、その共同によって子どもの成長を保障する教育をめざそうと考えて、「みんなの学校」という学校づくり方針をたてています。

また、研究の課題は、グローバル人材の育成などがしばしば求められるなか、いったい何が本当に子どものためになるのかを今一度よく吟味しなければならない時であることから、「“子どものために”の本質を問う」としています。

こうした方針や研究課題にそって取り組んだ2014年度の教育実践について報告いたします。

教育研究について

(1) 公開授業研究会・教科別自主研究授業

◆概要

今年度は例年のような教育研究会を行わず、毎年校内で行っている授業研究を公開することにし、こんにちの実践課題を明らかにしながら、本校の全教員と参会の先生方とで一つひとつの授業を検討して、次回に行う第42回教育研究会に向けた実践的研究を積み重ねたいと考えた。

◆今後の課題

何が本当に子どものためになるのかを深めていくために、今後も、授業づくりにおいては「教材の価値」と「主体的な学び」との関わりを考えていく必要がある。

また、そのとき、子どもの認識発達や身体発達の段階をしっかりと踏まえること、各教科の本質をこんにち的に吟味することが欠かせないと考える。

そうしたことに基づいて、各教科の目標や系統的な教材配列をより確かにしていくことが引き続き課題である。

(2) 附小の教育実践の土台となる学習会

- ①人間的自立についての学習会／2014年7月22日 13:30～16:30

◆実践報告―「学年のとりくみと学級の課題と」

◆講演／「新自由主義的環境の問題点と人間的自立の方向性

～他者とのつながり、本当の道徳性、学びあいのちから～

講師：愛知教育大学名誉教授／折出健二氏

◆成果と課題

○折出氏は、学校を「公共空間」と形容され、「未来をデザインすることを自分たちで実践しながら、他者に支えられる自分も誰かを支えているという相互性・関係性を意識化できる社会空間（場）」と意義づけたいうえで、「奈教大附小は学校の公共性を守ろうとしているのだから、こうしたことを実践課題としている学校ではないか」と話された。

また、「他者に支えられる自分も誰かを支えているという相互性・関係性を意識化できる社会空間（場）は道徳の基盤となり得、共同の学びが共同の自治に活かされることで道徳の主体形成が可能となる」と指摘され、これを『学校全体を通じての道徳教育』という原理の現代的読み替えとしてはどうか」という提起も戴いた。

○今後は、「他者に支えられる自分も誰かを支えているという相互性・関係性を意識化できる社会空間（場）」としての学校、また、共同の学びが共同の自治に活かされることによる『学校全体を通じての道徳教育』に向け、さらなる実践的積み重ねを続けていきたい。

②子どもの発達についての学習会／2014年8月28日9:00～15:00

◆実践報告―「低学年の子どもたち」

「中学年の子どもたち」

◆講演／「学童期の子どもの発達過程と教育指導の課題」

講師：北九州市立大学教授／楠凡之氏

◆成果と課題

○講演では、幼児期後期→低学年→中学年→高学年、それぞれの自我・社会性の発達の特徴とそれらを踏まえた教育指導の課題について話していただいた。中学年では、「思いを丁寧に聴き取り、他の子どもたちにも伝え、相互理解を築いていくこと」、また低学年では、「相互的な関係理解と友人関係の深まり―『一方向的な視点取得』の段階から『相互的な視点取得』の段階へ」とご指摘いただいた。

○今後は、各発達段階における発達課題と各学級の実態とを結びつけて目の前の子どもや学級集団の課題を具体的に明確にし、学年団や教職員集団が一致して取り組みを進めることが大事である。

(3) 研究紀要

教科部・特別支援学級部、また個々人の研究の成果と課題を確かめ合うために、年度末に研究紀要を発行する準備を進めている。

主な内容は、

- 一年間の研究全体のまとめ
- 公開研究授業や自主研究授業の成果と課題
- 各教科部・特別支援学級の実践のまとめ

としている。

(4) 特別なニーズのある子どもへの教育 (Special Needs Education)

学習面で特別な教育的ニーズのある子どもたちへの指導については、必要に応じて通級指導教室での学習を続けている。また、生活面での特別なニーズについては、担任・学年団と生活ニーズ委員会、また会議で話し合い、適切な手立てを取るようになっている。

事柄や状況に応じて両委員会合同の会議も開き、子どもや保護者への対応について話し合いを続けてきた。

今後も学級担任や単学年部会・複数学年部会と連携して、的確なタイミングでのはたらきかけをつみ重ねていきたい。

いちばんの課題は、取り出し指導などのためのマンパワーが不足しがちなことである。

(5) スクールカウンセラーの取り組み

2011年度より始めたスクールカウンセラーの取り組みも4年目を迎え、大学の久保千恵先生が子ども・保護者・教員へのカウンセリングを続けて下さっている。

子育てについて相談できる相手が少なくなり、保護者が子育ての悩みを独りで抱え込まざるをえない状況が増えている。こうしたことからスクールカウンセラーの役割は年々大きくなっており、ケースによっては、保護者との懇談に久保先生に同席して戴くこともある。

今後も久保先生と連携し、真にその子、その保護者の支えとなる方策を立てていきたい。

(6) 教育課程づくりを保護者に知らせる取り組み

学級通信や学期ごとに配布する「学習の見通し」「通知表について」、また月々の懇談会などで、教材のねらいや学習の進め方、また評価の観点・基準を保護者に伝え、附小の教育課程を理解してもらえるようにしてきた。

これからも付小の教育課程をわかりやすく保護者に伝えていく努力を重ねたい。

子ども研究について

(1) 子ども観を深める取り組み

子どもの人権を損なう問題(虐待、いじめなど)には、全教職員で機敏に対応することを会議などで確認している。一つひとつの事案や気になることは会議で報告して全教職員で共有し、学級担任・学年団、また養護教諭や専科教諭、生活ニーズ委員などが連携して取り組みを進めている。

また、夏に行った2回の学習会(人間的自立・子どもの発達)では、3つの学級から子どものこと・学級集団のことを報告し、研究者の講演にも学びながら子ども観を深め合った。

課題としては、引き続き一人ひとりの子どもの様子をよくつかみ、課題が感じられれば教職員全員で共有し解決に向けた取り組みを迅速に進めることである。

また、日々多忙なため、子どもの変化をつかむことや教職員間の連絡・連携が難しくなりがちでもあるので、仕事の精選と教職員の人員確保も重要である。

(2) 児童会活動

- ◆全校行事－児童委員会や5年委員会が中心となり、全校のなかまでつくりあげる行事に取り組んだ。

- 1年生をむかえる会（4月11日）
 - 体育大会（10月18日）
 - 「みんなでがんばりのしるしを見つけよう会」（2月24日）
 - 卒業の“会”（3月18日／予定） など
- ◆全校集会ーほぼ毎週の火曜日3時間目に全校集会をおこなった。児童委員による平和学習にかかわる発表や、学年・学級・専門部（図書部・体育部など）からの発表などがあった。学級や学年の発表を見合ったり聞き合ったりすることで全校の仲を深めることができた。
- ◆縦割りグループでの集まりー1～6年生のグループ（今年度は“さくらグループ”と呼称。5～7人ずつ）をつくり、異年齢集団でのグループ活動を進めた。6年生が学んだヒロシマの被害や願い、また般若寺の「平和の火」、世界の子ども平和像などを広めることができた。
- ヒロシマ修学旅行で学んできたことを伝える会（6月10日）
 - 体育大会での縦割り種目（10月18日）
 - 「一人一人の平和の思いをつなごう会」（2月17日）
 - 「みんなでがんばりのしるしを見つけよう会」（2月24日）
 - 「さくらグループで絵を見る会」（3月3日） など
- ◆課題としては、全校での児童会活動と各学級での学級集団づくりとの結びつきを明らかにして、児童会活動をよりいっそう一人ひとりの子どもの成長に結びつくものにすることがあげられる。

保護者・地域との共同で

(1) P T A 活動

次の取り組みを通して、附小教育への理解を図った。また、子どもたちのために、教員と保護者が共同して取り組みを進めることができた。

- ◆月々の学級（学年）懇談会で、その時期に取り組んでいる附属小学校の教育や学級づくりについて語った。
- ◆P T A 研究会“付小の先生 にとっておきの授業でー子どもの頃にタイムスリップ”（11月30日/土）で、8教科と特別支援学級の教育について理解を深め合うことができた。
- ◆学校保健委員会で附属小学校の健康教育や食育についての考え方を伝え、理解を深めてもらった。また、2月3日には講演会（『思春期の子育てに向けてー次世代を担う子どもたちを大切に産み育てていくこと』／講師：芝田和美氏・助産師・助産所わ院長）を開き、子どもの話をじょうずに聞くことの大切さなどを保護者とともに学んだ。
- ◆三附属P T A、つめくさ会、たかまどの会、付小教育を支える会の活動が進められ、附小教育の大きな支えとなった。「山焼きを見る会」（たかまどの会・付小教育を支える会共催/1月24日）には、400人を超える参加者があった。

また、“できることを、できる時に”という趣旨から、親子清掃（8月23日/土・参加220人）・ボランティア掃除（トイレ、手洗い場など）・ベルマーク集めなど、自主的参加の活動が進められた。

◆PTA活動への理解と協力を広げ、役員・実行委員などの担い手を増やすために、『PTA実行委員についてのアンケート』を2回実施した。

第1回目は、475家庭うち353家庭から回答（回答率74%）があった。また、第2回目には274家庭から回答があり、回答率は58%だった。

次年度に向けて、▽実行委員会中の保育の実施▽実行委員会のための交通費の支出▽いろいろな場で実行委員や役員の仕事を広めること、などの具体化が課題となっている。

(2) 地域との共同

◆飛鳥子ども安全ネットワークに加入し、地域の団体、方々とともに登下校などの安全対策に取り組んだ。1学期（5.28）と2学期（10.29）は登下校時の安全に関わる指導を全校で行い、飛鳥校区の子どもたちについては、ネットワークの人たちを紹介し、ネットワークの人の話を聞いた。3学期（1.21）は、下校時に交通安全指導を行った。

◆飛鳥中学校区少年指導協議会に加わり、地域と連携して子どもたちを守る取り組みを行った。

大学との連携など

(1) 教員採用

家庭科、また理科を研究教科とする教員をそれぞれ公募し、採用を決定できた。

(2) 附属間の連携や大学との共同研究

ユネスコスクールへの加盟申請が認められた。

今後、大学全体で推進されている「持続可能な発展のための教育」（ESD: Education for Sustainable Development）の理念に基づく教材・カリキュラムの開発を、学部・大学院・附属学校園の連携で進めていきたい。

(3) 教育実習

6月と9月に教育実習を、それぞれ3.5週間ずつ行った。また、事前には、教育実習基礎演習・教育実習事前指導として学年・特別支援学級・教科ごとなどの授業参観や講話などを行った。

また、1回生の「現代教師論」（1回生）での授業参観、2回生のスタートアップでの教育実習参観も実施した。

課題としては、「現代教師論」授業参観⇔スタートアップ実習参観⇔教育実習基礎演習・教育実習事前指導⇔教育実習をよりいっそう有機的に結びつけるための内容の吟味があげられる。

以上